

平盧節度使と泰山信仰

——『太平広記』所収「李納」伝を中心に——

新見まどか

はじめに

唐末から五代期の小説には、節度使やその軍団関係者が登場するものが多数存在する。唐代史において小説史料は従来、文化や家族構成の研究に活用されてきた。^①ただし、その内容には到底事実とは思われない怪異譚や神秘譚も含まれる。ゆえに歴史史料としてこれらを扱うには、どの程度史実を反映しているか慎重に検証する必要がある。

こうした中で近年、中国の苑汝杰は唐五代期の藩鎮関連の小説を総合的に整理し、その中から藩鎮の実態を読み取ろうと試みた「苑汝杰二〇一二」。苑氏の記述は節度使の婚姻や裁判、軍内の文武官の活動など多岐にわたり、他の史料では十分に窺えない藩鎮軍内の側面を提示して示唆に富む。小説史料といえども、その内容は決して無視できないのである。

ところで戦後以来、こと日本の藩鎮研究においては藩帥の権力構造が大きな論点となっており、藩帥と朝廷、あるいは藩帥と軍団との関連について、盛んに議論が行われてきた。この点を説明するうえで、

特に注目されたのは藩帥交替時の事情、特に河朔三鎮などにおける世襲の状況である。^②ただし、当時の史料は基本的に朝廷側の人物の手になり、藩鎮側の内部事情に深く踏み込むことは難しかった。

そこで、唐代の小説史料から藩帥の交替に関するものを精査してみると、『太平広記』巻三〇五（二四一八—二四一九頁）に収録された「李納」と題する物語が興味深い。この「李納」伝は、平盧軍（会府・鄆州）の藩帥李納（在任：七八二—七九二）が亡くなり、息子の李師古（在任：七九二—八〇六）が新藩帥として立つまでの出来事を、特に泰山における神異体験を軸として記したものである。もちろんその体験がいわば虚構を含むことは当然である。だが、この内容及びそのような創作が誕生した背景を分析することにより、平盧軍における新藩帥決定の際の軍団内部事情を窺い知ることができる。しかも泰山は唐代、朝廷のみならず平盧節度使からも厚い信仰を集めていた。この点を検証すれば、当時の藩帥権力と、宗教的な権威との関連性も判明する。

そこで本稿では、まず「李納」伝の内容と成立時期を把握し、次いで物語の舞台や登場人物について考察する。そしてその分析結果をも

とに、平盧節度使の藩帥権力と、泰山信仰との関連を探りたい。

第一章 「李納」伝の概要と舞台背景

(1) 「李納」伝の内容

「李納」伝全文を和訳して掲げれば、次のようである（記号・傍線は筆者。（ ）は補足、「」はセリフ、「」は注）。

〔史料1〕 貞元年間の初頭（七九二年）、平盧軍の藩帥である李納はとても病状が重かったたので、（部下の）押衛王祐を派遣し、泰山で祈禱をさせようということで、（王祐は）身を清めて出発した。

A泰山の西南までやって来て、遠く山の頂を見上げると、四〜五人の人がいた。（その内の主君一人は）碧色のはだぎと半袖のうわぎを着ており、（一方）彼以外の三〜四人は様々な色の服装と装身具を身につけており、こちらは従者であった。碧衣の人がはじきゆみ（小石を弾き出して小鳥などを狩る獵具）を携え、古樹の上に止まっていた山鳥を射るや、一発で命中し、鳥が樹から落ちて、従者たちは先を争ってこの鳥を捕まえた。王祐が先に山のふもとにやってきていた人々を見ると、全員が車から降りて蓋を閉じ、山に向かって一斉に礼拝していた。王祐が到着すると、（先に到着していた）路上の人々はそろって王祐を押しとどめ、車から降りるよう勧めた。B彼ら（碧衣の人に率いられた一団）は、三郎子や七郎子だったのである。こうして（王祐も）碧衣の人に拝謁した。従者は路上の人々に、（それぞれ自分の）車に乗るように指図した。路上の人々がためらっていると、碧衣の人身

ら（彼らの）手を取り、全員を再度車に乗せたところで、はじきゆみを手に持ち、（そこにあつた）建物の西南で、はじきゆみを使つて大地を切り裂いた。下を向いて見てみると、（地下に）なにやら役所らしきものがあつた。（碧衣の人は）王祐に気づくと、彼を自分の目の前まで呼び出し「何のためにやって来たのか」と言つた。王祐が仔細に（節度使李納の命を受けた）事情を答えると、碧衣の人は「お前の主君である節度使は既にこちらに来ていゝる。どうしてその上（お前まで）こちらにやってきたのか。節度使に会いたいとでも言うのか」と言つた。Cこうして（碧衣の人は）一人（の従者）に「王祐を連れて行つて節度使に会わせてやれ」と命じた。すぐに（王祐は地下の役所の）西院の門を開いて引き入れられたが、（そこで）李納が首かせをつけ耳を切り落とされ、むしろの上になうずくまつて庭に座つてのを見つけた。王祐は驚愕し、涙を流して（李納の）前に俯せになり、李納の左脚を抱きしめ、その皮膚に噛みついた。王祐を引率した従者は「王祐よ、退くがよい」と言つた。（王祐が従者に）引き連れられ、退去して（西院から）出てくると、D碧衣の人は依然として（役所の）本殿のきざはしにおり、王祐に「新しい節度使に会いたいか」と言つた。（そして）再度（従者の）一人に命じると、（新しい節度使が）東からやって来た。（彼の）姿形は小柄で肉付きがよく、顔だちも神々しくまことに敬愛すべき存在だった。碧衣の人は「この方が新しい節度使である」と言つた。王祐が（新しい節度使に）拝謁し終わると、（碧衣の人は）もう何も言わなかつた。王祐が声を出すこともできず、ややしばらくじっとして

いると、見えていた（碧衣の人や役所などの）ものが忽然と消え去り、ただ青々と苔むした松や柏の木（が立ち並ぶ）だけで、一帯はひっそりと静まりかえっていた。そこで（王祐は当初の予定通り泰山南麓の岱廟で）供物を献じ祭祀を行ったうえで（李納の元に）帰り、李納に謁見すると、李納は王祐を寢室にまで呼び入れ、（何があったかと）尋ねた。王祐は、祭祀を終えて木製の采を投げ（占いをし）た結果、みな吉兆ばかりだった、という件だけを李納に伝えた。（ところが）李納は「王祐よ、どうして真実を述べないのか。なにゆえ（あのとき）私の脚に噛みついたのか」と言った。そして（李納が）脚を上げて見せると、なんと（李納が地下の役所にいた証拠に）王祐が噛みついた傷跡が（李納の）脚についていた。王祐は（碧衣の人と遭遇した出来事が幻ではなかったと知って）平伏し、本当のことを事細かに告白した。李納は「遣いに）行って新しい節度使に会ったというが、それは誰なのか」と尋ねた。王祐は「お顔を）拝見すれば分かります。お名前は存じ上げません」と答えた。Eそこで李納は（後継者候補の）三人を呼び出した。（その三人のうち、李納の息子）李師古がやってきたときに（王祐は）「この方こそ新しい節度使です」と言った。そこで李納はどうとう（李師古に）後事を託し、言い終わるやいなや亡くなった。（なお）王祐は（地下の役所で）李納が首かせをつけられているのを見た当初、「李僕射（李納）、どうしてこのような目にあっているのですか」と尋ねた。李納は「私の平素からの罪の（罰を受けた）ためである。（人が死後に泰山で地獄の裁きを受けるのは）そもそも最早どう

することもできないのだから、今更何を言うことがあるのか」と答えた「出典は『集異記』である」^③。

長い物語だが、要点をまとめ直せば以下のようなだろう。

①前提 徳宗皇帝の貞元八年（七九二）、平盧節度使であった李納が病気で重篤となった。そこで、押衙という肩書を持つ部下の王祐が、祈禱のため泰山に派遣された。王祐は早速泰山の西南までやって来たが、そこで「碧衣の人」と描写される不思議な人物に遭遇した。

②王祐の神異体験 「碧衣の人」は自分の従者に命じ、王祐を地下の役所と思しき場所の「西院」に案内した。なんとそこには、本来鄆州で病床にあるはずの李納がいたのである。だが李納は、首枷を付けられ耳を切り落とされるという、異様な姿であった。続いて「碧衣の人」は、王祐を東方からやって来た新しい節度使に引き合わせた。ただし、この時点では新しい節度使の名前は明かされない。その後、「碧衣の人」も地下の役所も忽然と消え失せた。

③後日譚 王祐は李納の待つ鄆州に戻り、泰山で体験した神異を李納に告白した。すると李納は、新しい節度使が誰なのか知りたがり、候補者を三人呼び出した。李納の息子である李師古が現れるや、王祐はその容貌を見て、彼こそ「碧衣の人」が指名した新しい節度使だと述べた。そこで李納は李師古に後事を託し、言い終えて亡くなった。

要するに本物語は、平盧節度使李納の部下王祐が、泰山で体験した神異をもとに構成されているのである。そこで次に、この物語を理解するため、平盧軍や泰山、そして物語の成立時期など、基礎事項を確認する。

(2) 舞台背景と成立時期

①平盧軍⁴ 平盧軍は、八世紀半ばに營州に設置された。初代節度使は安祿山であった。安史の乱が起きると、平盧軍は渤海湾を渡って南下し、乱後、現在の山東省から河南省の一部まで及ぶ、広大な領土を有す藩鎮となった。さらに河朔三鎮などと連携してしばしば朝廷に反目する態度を取り、十万と号す軍団や交易の利を背景に、半独立勢力として隆盛した。八世紀後半から九世紀初頭の節度使は李氏による世襲であり、本物語に登場する李納から李師古への継承も、その一例である。また、当時は領域のちようど中心付近に泰山を擁していた。

②泰山⁵ 泰山は現在の山東省兗州に位置する山岳で、中国では古来より五岳のひとつ、東岳として信仰を集めてきた。泰山の特徴としてまず想起されるのは、歴代皇帝によって挙行された封禪儀礼である。「封」は泰山山頂で行われた天をまつる行事、「禪」は泰山山麓の社首山・蒿里山もしくは梁父山で行われた地をまつる行事である⁶。

加えて泰山固有の役割として、生命を司ることが挙げられる。泰山研究に先鞭をつけたフランスの東洋学者シャヴァンヌは、泰山を「命が生まれ帰りのつく山」と表現した [Chavannes 1910 菊地二〇〇一、一六頁]。泰山の方位である東方は、太陽が昇る方角である。ゆえに泰山は、あらゆるものの誕生を司る。これは同時に、全ての死者が泰山に帰ってくることを意味した。そこで死者の魂の集う場所が、泰山のふもと、蒿里山の地下に設定された。さらに仏教が流入すると、蒿里山は地獄と結び付き、唐代には蒿里山の地下で地獄の賞罰が行われると考えられるようになった [Chavannes 1910 菊地二〇〇一、一七頁]。周知のとおり、地獄の裁判官は泰山の主神、東岳大帝(泰山

府君)である。

③本物語の成立時期 では、この物語はいつ、どのような場で成立しないし収録されたかのだろうか。参考となるのは、本文末に注記された出典『集異記』である。現行本『集異記』は一巻十六篇で、「李納」伝は収録されていない。しかし『太平広記』中には、出典に『集異記』を挙げる物語が八十篇以上確認できる。また『新唐書』巻五九、芸文志(一五四一頁)には「薛用弱 集異記三卷」との記述が残る。これらを勘案すると、『集異記』は成立当初は三巻本だったが、次第に遺漏して一巻本になり、遺漏分が『太平広記』に残ったと考えられる。今回扱う「李納」伝もその遺漏分の一つであろう。

そこで問題となるのが『集異記』の成立年代である。残念ながら著者薛用弱に関しては墓誌なども確認できず、詳細は不明である。しかし前掲『新唐書』芸文志の注は、薛用弱の経歴を「字は中勝であり、長慶年間(八二一〜八二四)に光州刺史であった」と記す。九世紀は多くの州が節度使・觀察使の管轄下にあり、光州も淮南節度使の所管に属していた。そして、藩鎮のもとに身を寄せた幕僚たちの語りの場で、武人らを登場人物とした多くの伝奇小説が形成されたという「小南二〇〇四、二三八頁/苑汝杰二〇一二、三〇六頁」。そうだとすれば『集異記』も、薛用弱が光州赴任中に聞き集めた物語を採録したものであった可能性は高い。ゆえにこの著書の成立時期は、薛用弱が光州刺史の任にあった八二〇年代、広く見積もっても彼の生没年を想定して八世紀末から九世紀前半とみて良いであろう。

「李納」伝の内容は、李納が没した貞元八年(七九二)の出来事であり、『集異記』成立との時間的な隔たりはわずかず数十年しかない。

ゆえに「李納」伝は、当時の人々がある程度の「事実」と受け止めた平盧軍の情報を反映した出来事として、検証することが可能であろう。平盧軍は元和十四年（八一九）に朝廷との武力衝突に敗北し、領域と軍団は三分割された。⁸⁾あるいはこのときに平盧軍から脱出した何者かが語った内容が、光州の薛用弱のもとまで届いたのかもしれない。なお、「李納」伝流布の背景については後ほど、第三章第三節でも言及する。

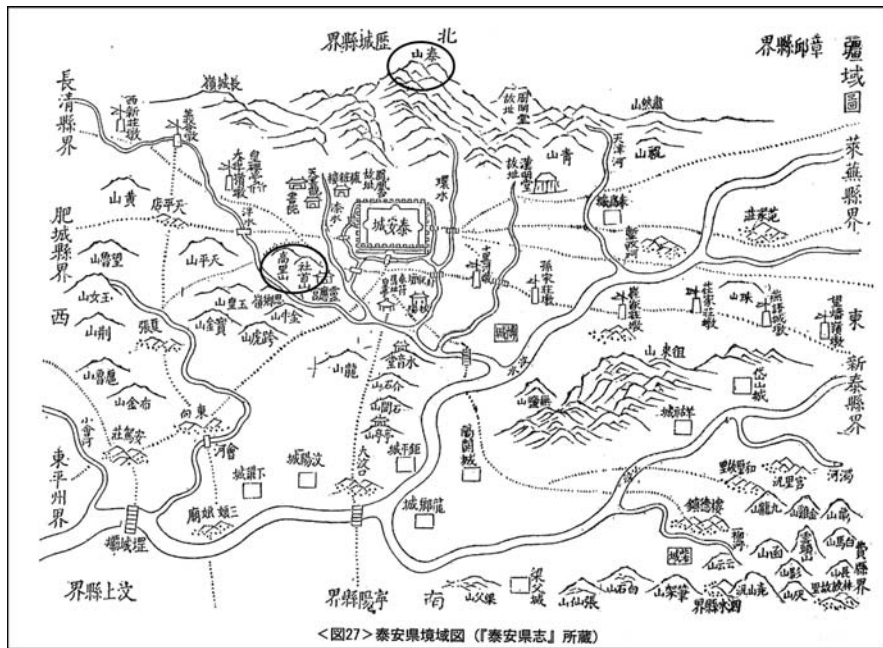
これまでの考察により、「李納」伝の基本的な舞台背景が明らかとなった。ただし本文の内容を理解するには、まだ不明瞭な箇所が多く残る。そこで次章では改めて、「史料1」にみえる各事象の解釈を行いたい。

第二章 「李納」伝内容の解釈

(1) 泰山西南の「山」

「李納」伝の内容を理解するうえでまず検証したいのは、使者王祐が神異を体験した現場は泰山のどこか、という点である。「史料1」下線部Aは、王祐が泰山の西南までたどり着いたとする。これは、王祐がまだ泰山そのものまで到着しておらず、その西南のふもとにいたことを意味する。また、直前の原文で泰山のことを「嶽」と表現している点からみても、王祐が見上げた「山」は、泰山ではなく、その西南方面にある別の「山」だった可能性が高い。

実は泰山周辺には、(図1)のように固有の名がついた小さな山がいくつも存在する。こうした山々のうち特筆されるべきは、社首山・

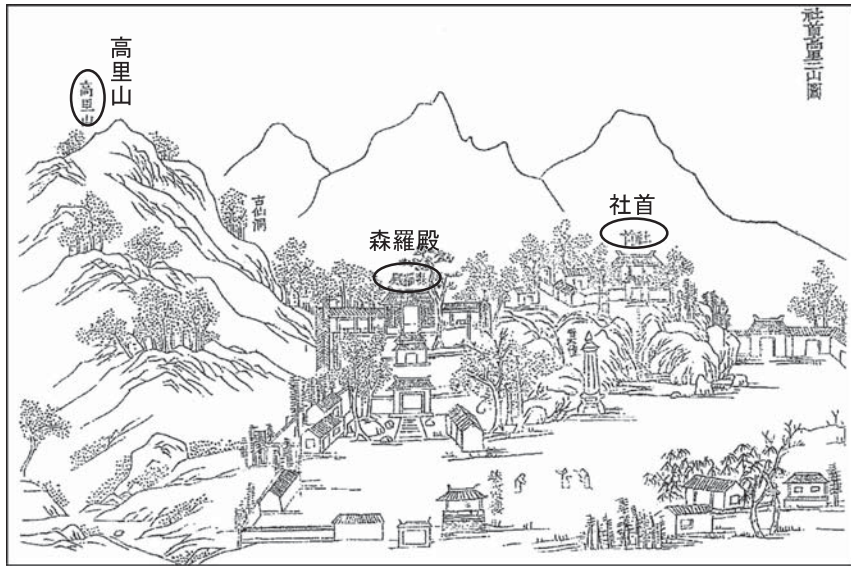


＜図27＞泰安縣境域圖（『泰安縣志』所載）

図1 泰山と社首山・蒿里山

菊池 2001, p.61 (出典：清、黄鈴『泰安縣志』) より転載、加筆。

蒿里山の二山であろう。この二山は、泰山山頂からも、また泰安城からもまさに西南方向に位置していた。しかも二山は(図2)のように小高い丘の様相を呈しており、十分に山頂まで目が届いたはずであ



社首、高里二山図

図2 社首山・高里山と森羅殿
清、金榮『泰山志』巻4「社首・高里二山図」p.85より転載、加筆。

る。加えてこの二山で禪のまつりが挙行されたこと、特に蒿里山の地下に地獄が設定されていたことは先述した。ある意味では社首山・蒿里山は、泰山そのものと並んで泰山信仰を支える両輪だったのであり、それが泰山の西南に位置することは、下線部Aの「西南」という

方位の意味を解釈するうえで非常に興味深い。

王祐の至った場所が社首山・蒿里山付近ではないか、との推測をさらに裏付けるのが、下線部Cの、首枷をつけられた李納が地下の役所の「西院」（西側の建物）にいた、という記述である。王祐がたどり着いた場所には何らかの建築物があり、その構造は西側と東側とに分かれていたらしいのである。また建物の用途は、人に首枷をつけるような行為、つまり刑罰に関連したことも窺える。

残念ながら現在、社首山・蒿里山の遺跡は破壊されほとんど残っていない。「沢田・窪一九八二、七二頁」。しかし明代の地志『岱史』（明、查志隆、巻九、靈宇記、森羅殿左爲閻王廟条、一一〇頁）には「蒿里山の祠は、泰山の岱廟から西南に三里ばかり行った、社首山の壇の左にある。唐代から宋代にかけては、（参拝者による）焼香の煙が絶えなかったものである」と記されており、少なくとも唐代には蒿里山に「祠」とされる建築が存在し、信仰を集めていたことが分かる。

実際、一九二〇年代以前はこの山に「森羅殿」という建物が存在した（図2）参照。当時現地を訪れたシャヴァンヌは、この森羅殿に関して最も詳細な記述を残した（Chavannes 1910＝菊地二〇〇一、六三―六四頁）。

〔史料2〕 一七一、森羅殿。……建物（引用者注…森羅殿）の後ろに庭があり、奥に至元二十一年（二二八四）銘碑「重修蒿里山神祠記」がある。庭を囲む塀に沿って地獄の法廷七十五司が並び、罪人を懲らしめる刑罰のさまが表わされている。七十三番までの奇数番の法廷は東側の塀にあり、偶数番と七十五番の法廷は西側の

壁にある。塀の奥が列の始まりで、そこに三曹が君臨する。中央の裁判官は緋の衣をまとい口髭をたくわえている。向かって右の裁判官は青い衣で顎鬚を生やし、左の裁判官は緑の衣で髭はない。

この報告によれば、森羅殿の塀には東西に分かれた七十五司が描かれていた。七十五司はそれぞれが地獄の法廷であり、罪人が様々な刑罰を受けていた、という。こうした森羅殿の描写は、「史料1」にみえる建物の様子や李納に対する処遇と酷似している。

以上のように、方位・景観、そして建築物とその役割に鑑みれば、王祐がたどり着いた場所は泰山そのものではなく、その西南方に位置した社首山・蒿里山とみるのが妥当であろう。王祐はそこで、地獄の裁判現場に立ち会ったのである。

(2) 「碧衣の人」は誰か

続けて、王祐が遭遇した「碧衣の人」についてみていきたい。まず注目されるのは、彼の衣服の色「碧」である。これは青緑色ないし青色だが、物語の舞台が泰山近辺だったことを考慮すると、非常に示唆的な色彩設定である。なぜなら、青（緑）は五行思想では木に相当し、木は五方では東に相当する。そして東は取りも直さず、五岳のうち泰山が司る方位に他ならないからである。要するに「碧衣の人」は、泰山を表す色の衣服を身にまとった人物、ということになる。¹¹⁾

このことは、「碧衣の人」が泰山と密接な関係にあったことを意味する。しかも彼は王祐の眼前で様々な神異をみせており、到底ただの人間とは思われない。むしろ、何らかの泰山神と考えるのが妥当であ

ろう。ところが「史料1」中には、彼の正体を明示した文言は見当たらない。そこで参考としたいのが、下線部Bが記す、「碧衣の人」に付き従っていた「三郎子や七郎子」なる人々である。

まず「三郎子」について、『旧五代史』巻四四、唐書二〇、明宗本紀（長興四年（九三三）七月条、六〇五―六〇六頁）に次のような記事がある。

〔史料3〕 己卯の日、泰山の三郎神に威雄大將軍を贈った。もともと、明宗が病気になったとき、先の淄州刺史であった劉遂清なる者が泰山の僧一人を推薦し、医術に優れていると言ったが、（実際に明宗が）謁見してみると、ただの凡庸な僧であった。医術について尋ねたところ、僧は次のように言った。「私は医術に熟練してはおりません。（実は）以前、泰山の山中で私は東岳の神（東岳大帝）にお会いしまして、（大帝は）拙僧に、『わが第三子の持つ靈威の力は敬愛されるべきものであるのに、まだ（朝廷から）官爵や秩禄を授かっていない。法師よ、私のためにこの件を（朝廷に）請願してこい』とおっしゃったのです」と。朝廷では僧侶の言ったことを神異とみなしたので、この（威雄大將軍を贈るといふ）詔勅が降ったのである。¹²⁾

これは五代後唐期の史料で、東岳大帝の第三子が、明宗から官爵を授かった記録である。彼は宋代になると一層信仰をあつめ、皇帝真宗から「炳靈公」の名を賜った。¹³⁾二十世紀初頭までは、岱廟内にも炳靈公をまつる炳靈宮が存在した [Chavannes 1910 II 菊地二〇〇一、八二―八三頁]。これらを踏まえれば本文の「三郎子」とは、後の炳靈公に相当する東岳大帝の息子とみて大過ない。

一方「七郎子」だが、残念ながらこちらは該当する存在を見出すことができなかった。ただし、「何々郎」という名の神は唐代から宋代にしばしばみられ、「七郎」と呼ばれた神も「招宝七郎」「潘七郎」「西官七郎」など、複数いた。「二階堂二〇〇七、四八頁」。ゆえに七郎子も、やはり泰山神の一人と考えられる。三郎子と並列されている点を考慮すれば、今は知られない東岳大帝の息子だったのではないか。

王祐に神異を体験させた「碧衣の人」は、かかる二人を従者として従えていた。このことは、彼がただの泰山神ではなく、東岳大帝の息子を凌駕するほど高位の神格であったことを意味する。しかも彼は李納の死を予見しており、かつ地獄の裁判権までも有した。これだけの条件に合致するのは、泰山の主神、東岳大帝において他には考えられない。すなわち「李納」伝は、王祐が泰山西南方の社首山・蒿里山で、冥府を司る東岳大帝と遭遇した体験談、ということができよう。

(3) 王祐の体験

では、王祐が体験した出来事は、どのように分析できるだろうか。そもそも王祐の使命は泰山での祈祷であった。祈祷の詳細は明記されないが、主君李納が危篤であり、かつ目的が泰山だったことを考えると、目的は請命（東岳大帝に対し、後事を処理するまで死を猶予してくれるよう、代理人をたてて岱廟で祈る行為「沢田・窪一九八二、六五頁」）だったかもしれない。

しかし実際には王祐は、岱廟にたどり着く前に東岳大帝と遭遇した。このとき王祐は、東岳大帝から藩帥関連の教示を二つ受けている。まずは「史料1」下線部Cにみえる、現在の節度使、李納関連の

情報である。地下の西院で、李納は首枷を着けられ耳を切り落とされるという、明らかな罪人の格好でむしろの上に座っていた。そしてこの理由を、李納は「史料1」末尾で自ら「生前の罪の罰を受けたため」と語っている。彼は、蒿里で地獄の裁判を受けていたのである。すなわちこの部分は、既に李納の命数が尽きていることを意味する描写である。

これに続くのが、新しい節度使、李師古関連の情報である。下線部Dによれば、新しい節度使は小柄ではあるが、藩帥にふさわしい立派な容貌だった。そして重要なのは、彼が東岳大帝に呼び出され、東方から現れたことである。東方は泰山の方位、日が昇る方向であり、李納がいた建物が日の沈む西側だったのとは対照的である。つまりこの部分は、先の李納と対比させつつ、新たな藩帥の誕生を王祐に認識させる描写となっているのである。

元来、泰山神の本分は、人間の生死を司ることだった。確かに下線部Cにおいて、東岳大帝は李納の死と死後の刑罰を監督しており、この点で彼の役割に過不足はない。一方注意すべきは、下線部Dにおいて東岳大帝が新たな藩帥の指名を行ったことである。これは、新藩帥誕生の描写ではあるが、反面、生命の誕生といえる描写ではない。ある意味では本物語において、東岳大帝本来の役割は巧妙に敷衍され、藩帥の交替をまでも司る存在として描かれているのである。

唐後半期に成立した説話にみえる地獄は、裁きの場としての性格を次第に失い、将来や来世に関する予言の場へ変化するという「朴永哲一九九七、一一九頁」。本物語は、まさにこの過渡的な段階にあるものと位置づけられよう。とはいえ、他ならぬ東岳大帝が次期藩帥を指

定したことは、平盧節度使にとつて大きな意味を持つ。なんとなれば、藩帥の交替が東岳大帝の思し召しである以上、授かった藩帥位もまた東岳大帝によつて保証されたもの、という解釈が可能になるからである（実際に藩帥位を授けるのは唐朝廷であるにも拘わらず）。そうだとすれば本史料は、藩帥権力と泰山との関連を説明するうえで、非常に興味深い事例となる。そこで続けて、なぜこの物語が誕生したのか、当時の泰山信仰と平盧軍の内情に着目して考察したい。

第三章 「李納」伝成立の背景

(1) 平盧軍にとつての泰山

「李納」伝が成立した背景を解明するために、ここでは当時の人々が泰山に対し如何なる認識を抱いていたかを確認したい。唐代は、道教・仏教両面において、泰山信仰が隆盛を極めた時期であった〔劉慧一九九四、一六九頁、一九一頁〕。特に朝廷からの信仰は厚く、高宗（在位：六四九～六八九）・玄宗（在位：七一二～七五六）期には泰山で封禪が行われ、さらに玄宗は泰山神を「天齊王」に封じている。¹⁵ さらに「李納」伝当時の皇帝である徳宗（在位：七七九～八〇五）は、各藩鎮のもとに使者を遣わし五岳を祭らせた。¹⁷ 唐朝は、泰山の祭祀を通して国家の安定と統一、そして唐皇帝を中心とした天下秩序を全国に宣揚したのである。¹⁸

では、肝心の平盧軍内の人々は、自らの領内にそびえる泰山にいかなる認識を持っていたのだろうか。これについては、唐代の文人杜牧が残した、次の文章が参考となる（唐、杜牧『樊川文集』巻六、燕將

録、五四七～五四八頁）。

〔史料4〕（かつて）齊（平盧軍）の人々は、領域は数千里にも広がり、（背後は）渤海（で攻めてこられないこと）を頼りにし、（領域の中心にあった）泰山を障壁とし、（北側は）黄河を塹壕とし、数億人の精兵が剣をたばさめば、どんな災厄も安寧に導くことができる（などと言っていた）。だが（その平盧軍は会府鄆州の）潭趙県にて（朝廷軍に）敗北し、（藩帥の）首級を都にさらすこととなった。¹⁹

これは、平盧軍が憲宗によつて討伐され、藩帥李師道（李師古の弟）が部下に殺害された、元和十四年（八一九）の出来事を回想した記述である。元和十四年までの平盧軍の領域は、北端が黄河であり、その南に会府鄆州があり、さらにその南に泰山を擁すというものであった。ゆえに平盧軍は泰山を、渤海・黄河と並ぶ天険と捉えていたという。

この〔史料4〕で興味深いのは、泰山があたかも軍団を守護する山岳であるかのように描写されていることである。実は泰山信仰には、しばしば戦争との関連が見受けられる。例えば、泰山を象徴する封禪儀礼は元来、夷狄の討伐という軍事的成功を前提条件としたものであった〔桐本一九九七、一三八～一四一頁〕。唐代についても、太宗による封禪計画や高宗による封禪が提唱・実施された背景には、それぞれモンゴル高原の突厥、及び朝鮮半島の百濟などの平定があったという〔笠松二〇〇九〕。加えて、泰山神を通して天帝に軍事の成功を祈っていたことを示す明代の願文も複数存在する〔Chavannes 1910 II 菊地二〇〇一、一五一～一六頁〕。これらを念頭に置けば、元来武人集団

である藩鎮、中でも泰山を領域の中心に戴く平盧軍が、この靈岳にとりわけ強い信仰心を抱いたことは想像に難くない。

平盧軍と泰山との繋がりをさらに裏付けるのが、次に引く題名碑である（清、唐仲冕『岱覽』卷一二、岱陽中「敬謨等題名」二八〇頁）。

〔史料5〕（題名碑の）文章は次のようなものである。平盧淄青度支

判官・中大夫・檢校尚書工部郎中・兼侍御史の敬謨、節度押衙・

中大夫・試殿中監の馮珣、文林郎・守兗府兵曹參軍の田浩、朝散

大夫・行任城県令・権知乾封県令の楊序、節度驅使官・朝散郎・

試光祿寺主簿の明干、文林郎・任城県尉の高鏗、泰山の案内人呂滔。

唐の建中元年（七八一）二月二十九日、泰山に上つて瑤池を訪れたので、その記録をここに記す。

右の記録は、東側の石碑の側面第七層にある。²⁰

この史料は、泰山に登つた平盧軍関係者が、各々の肩書と名前を列記したものである。筆頭は平盧淄青度支判官、すなわち平盧軍の財政担当²¹である。続く節度押衙は軍内の庶務を司つた藩帥側近²²、節度驅使官は様々な雑務に従事した下級幕職官である。他に、泰山が位置する兗州の兵曹參軍や、兗州管下の任城県・乾封県の県令・県尉の名もみえるが、当時平盧軍は、朝廷の意向に沿わず州県官を独自の裁量で任命していた。²⁴ゆえに彼らも、朝廷よりはむしろ節度使側と懇意な人物だったであろう。

このときの泰山訪問理由は記されないが、平盧軍の軍将らはわざわざ現地の州県官を伴って登山しており、単なる物見遊山とは考えにくい。折しも題名碑が刻まれた建中元年（七八一）の正月には、その後

足かけ七年にわたる藩鎮反乱が勃発していた。²⁵平盧軍もこれに積極的に関与し軍団を動員したので、一連の軍事行動のために泰山神へ加護を祈つた使者団かもしれない。

さて、〔史料4、5〕により、平盧軍においては泰山が精神面のみならず、地理・軍事面でも軍団の拠り所と捉えられていたことが判明した。では、こうした泰山の存在が、藩帥の交替となぜ関連したのだろうか。それを解明すべく、当時の平盧軍の内部事情に注目したい。

（2）藩帥交替時の平盧軍

本節では、平盧軍の藩帥交替に際し、なぜ泰山が利用されねばならなかったのかを考察する。そのためには、李納・李師古期の平盧軍の内情、特に「李納」伝と関連の深い藩帥交替時の事情を見ていく必要がある。というのも「李納」伝は、あくまで平盧軍の押衙王祐の体験談、という体裁をとって収録されているからである。仮にこの物語が『集異記』採録前に数段階の伝聞を経ているとしても、元々の出所は平盧軍内、ことに主要登場人物たる藩帥やその周囲にあつたと考えられるのである。

本物語の主人公李納は、父李正己から藩帥位を世襲した後、十年の在任を経て三十四歳で亡くなった。彼には息子が二人おり、兄が李師古、弟が李師道といった。²⁷李納の死後、李師古が軍団に擁立され藩帥位に就いた。²⁸ただし、藩帥位世襲の際に軍団推挙の体裁をとるのは、河朔三鎮等にも広くみられた方法であり、決して李師古が特殊だったわけではない。

さて、この藩帥就任時を回想して、後に李師古は次のように語つた

という（『資治通鑑』卷二三七、元和元年（八〇六）条、七六三三頁）。

〔史料6〕 私は十五歳で（節度使の証である）旌節を受け継いだ、我ながら農業がどれほど困難か知らなかったのを後悔したものである。ましてや（弟の）李師道は、私よりさらに数歳年下である（から、何も知らないのも当然だ）。（そこで）私は彼に、自分の衣食が如何にしてまかなわれているかを教えたいと思ひ、一時的に（本来彼のような人間がやるべきでない）州県の官に任命してきたが、どうやらこの考えを皆は全く理解してくれないようだ。

この述懐によれば、李師古は藩帥になったときわずか十五歳であり、当人も自覚するほど、為政者としての経験が不足していた。この頃、十五歳前後で世襲により藩帥に就いた例は、相衛節度使の薛平（十二歳）や、魏博節度使の田季安（十五歳）がいた。ただし、薛平はすぐに藩帥位を叔父に譲って軍から逃亡しており、田季安は就任当時、亡父の嫡妻による後見・監督を受けたという。李師古も、独力で軍団を運営するに到底未熟だったこと、想像に難くない。

しかも（史料1）下線部Eを信じるなら、李納の後継者候補は三人おり、李師古はそのうちの一人に過ぎなかった。他の候補の具体名までは判明しないが、おそらくその中には、李師古の異母弟李師道の名も含まれていたであろう。なぜなら、李師道の生母は成徳節度使李宝臣（張忠志）なる人物の娘であり、彼女こそが李納の嫡妻だったと考えられるからである。藩帥が世襲される場合、基本的には嫡長への継承が志向されたので、年長とはいえ嫡子たる李師道を差し置いた李師古という人選は、一種の特例だったといえよう。

また、〔史料6〕では特に農政に関する反省がみられたが、実は平盧軍は、同時に軍事的にも危機的な状況に瀕していた。それが、次の史料（『旧唐書』卷一二四、李師古伝、三五三七頁）である。

〔史料7〕 成徳節度使の王武俊は、軍を率いて（平盧軍の領域である）德州・棣州（の境域）に駐留し、今にも（棣州の塩産地である）蛤蜊及び三汊城を（平盧軍から）奪い取ろうとした。……李納が亡くなったところ、（子の）李師古が平盧節度使を継承した。王武俊は李師古が年若くして初めて節度使となり、（安史の乱以来の）旧来の武将も多く死んでいるので、心の中ではたいそう平盧軍を侮り、軍勢を率いて蛤蜊及び三汊城を奪取することを名目とし、その実、李納の境域（である德州・棣州）を窺おうとしていたのである。

この史料で平盧軍を攻撃した王武俊は、安史の乱中に史思明の武将として活躍し、乱後は主君の李惟岳を殺害して成徳節度使の地位を得た勇猛な契丹人である。一方平盧軍では、彼に対抗し得る百戦錬磨の武将がすでに亡くなっており、戦況は圧倒的に不利であった。加えて王武俊による軍事進攻は、そもそも李師古が若年であることを侮ったためとされる。要するに李師古が藩帥位に就いたとき、平盧軍は内外ともに、決して安定的な情勢ではなく、李師古自身の適正にも疑問の余地があった。李師古ないし彼を擁立した軍団は、藩帥への求心力を強化し、軍政の基盤を固める喫緊の要請に迫られたと思われる。

かかる状況を踏まえたとき、「李納」伝は死にゆく李納よりもむしろ、藩帥位に就いたばかりの李師古にとって、極めて都合の良い内容であることに気付く。というのも、李納は地獄で刑罰を受けるとい

やや否定的な役回りなのに対し、李師古の場合は〔史料1〕下線部Dにあるように、他ならぬ東岳大帝の神託に基づいて藩帥位に就くという、良い役回りを与えられているからである。この神託が絶対的ともいえる効力を發揮したことは、即座に後継者を李師古に決めた李納の判断からも読み取れる。ある意味では「李納」伝は、一方では李納の死と地獄の刑罰を描きながら、もう一方では李師古の藩帥位継承を、東岳大帝の命というかたちで正当化する働きをも有していたといえる。

実は『太平広記』中には、地獄を訪れた人物が後唐・廢帝の即位を予言された説話が残っており、朴永哲「一九九七、一〇八頁」はこれを、地獄が現実の政権を正当化する手段に変貌したものと説明する。おそらく「李納」伝もまた、泰山信仰を利用して李師古を権威付け、藩帥位継承を円滑に行いたい、という平盧軍内の強い要請のもと、誕生したのではないだろうか。

(3) 「李納」伝流布の背景

さて、藩帥就任時は心許なかった李師古であるが、その後病没するまで十五年間の治世は充実していたようである。彼は、父李納の代における塩産地の喪失や有力武将の死、及びそれに伴う経済力・軍事力の低下を補うべく、様々な施策を実施した。まず、活発な対外交易によって財源をまかない「鄭炳俊二〇〇四、五五六―五五七頁」、祖父の代には十万といわれた軍団を五十万といわれるまで拡大した³⁹⁾。続いて、塩産地とほぼ同時に失った大運河方面の要地を回復すべく、しばしば軍事行動を展開した「新見二〇一三、六七―六八頁」。さらに、

「亡命」や朝廷で罪を得た人物など、多くの人材を登用したが⁴⁰⁾、中でも文人の高沐や武将の劉悟は李師古の死後、弟李師道が藩帥位に就いた際に、それぞれ判官・都知兵馬使として軍団の中樞を担うに至った⁴¹⁾。なお劉悟は最終的に李師道を裏切り殺害してしまいが、このとき李師道一族を悉く誅殺ないし遠流に処さんとした朝廷に対し、李師古の息子だけは処分を軽減するよう嘆願しており⁴²⁾、亡き李師古から蒙った恩顧への配慮が垣間見える。以上のような李師古の実績や武将からの支持に鑑みれば、李師古の藩帥としての適性を保証した「李納」伝は、少なくとも平盧軍内では相応の信憑性を持って流布していたと考えて良からう。

ただし、李師古が自ら東岳大帝の神託を受けたと名乗った形跡は見当たらない。「李納」伝にあるとおり、この神託を授かったのは李納・李師古ではなく、李納の側近と思しき押衙王祐である。そればかりか、肝心の東岳大帝は「碧衣の人」という表現で示唆されるのみで、正体が明かされることは無い。さらに「李納」伝は末尾でやや蛇足的に、死後の裁判からは逃れられない旨を李納に語らせ、地獄説話的な要素を前面に押し出している。では、李師古の権威付けは、なぜこれほど遠回しに行われねばならなかったのだろうか。

この点についてはおそらく、平盧軍と朝廷との関係が重要となる。唐代が平盧軍のみならず、朝廷も熱心に泰山を信仰し、二度にわたる封禅まで実施した時代であることは既述のとおりである。そのような中で、もし李師古が自ら東岳大帝の命を受けた、などと公言すれば、朝廷との間にいかなる問題が発生するか分からない。実際、李師古は常に朝廷への対応に配慮しており、内心では軍事的な野心を抱きなが

らも、表面的には朝命を奉ずる態度を崩さなかったという⁽⁴⁾。東岳大帝の神託によって李師古を権威付けるにしても、それはあくまで軍団内のみに作用し、朝廷の咎めを受けぬ範囲で行わねばならなかったのである。

このような平盧軍の微妙な立場を踏まえるならば、泰山に基づく藩帥の権威付けが大々的に宣揚されなかった理由は、次のように説明できよう。すなわち平盧軍は、「碧衣の人」の正体を敢えて伏せ、またその神託を藩帥自身ではなく押衙王祐の口から語らせることで、万一の際に朝廷に対して言い逃れが可能な余地を残した、と。だからこそ「李納」伝は、史実とされる正史等ではなく、虚構を含む小説史料とどうかたちで、現在まで伝えられたのではないだろうか。

おわりに

本稿では、『太平広記』所収の小説「李納」伝を分析し、当時広く流布した泰山信仰と、平盧軍の藩帥交替とを関連付けて考察した。そしてこの小説は平盧軍が、泰山の主神東岳大帝という宗教的権威を利用し、若年かつ実力不足な藩帥権力の権威付けを図ったことを物語ると指摘した。また、これが敢えて小説史料として残存した理由は、内容に一定の信憑性を持たせつつ、出来るだけ朝廷を刺激しないよう注意を払ったためではないか、とした。

唐代藩鎮と宗教との関連は従来、盧龍節度使における石経事業や、成徳節度使による臨濟宗庇護など、主に仏教方面から注目されてきた。こうした仏教事業の背景は、精神的な安定を求めたため「馮金忠

二〇一二B、一二三―一二四頁」、もしくは儒教的な伝統以外の新たな文化的素養を求めたため「柳田一九六〇、一七八頁」とされるが、ともすれば節度使の退廃、との批判的評価「渡邊一九九五、一二七頁」をも免れなかった。しかし本稿の考察を踏まえるなら、今後は藩鎮が携わった多様な宗教活動が、藩帥権力を支えるための理論武装として作用した側面も考慮する必要がある。既に五代期以降の沙陀政権については、五臺山信仰が中華支配の正当性を宣揚するうえで重要な要素になっていたことが指摘されている「中田二〇一四、二二三頁」。平盧軍や河朔三鎮のような藩帥権力は今後、このような視点も加えつつ捉え直す必要がある。そしてその際には、本稿で扱ったような小説史料にみえる節度使の宗教活動も、さらに活用してゆけるのではないだろうか。

史料版本

『太平広記』『旧唐書』『新唐書』『旧五代史』『宋史』『資治通鑑』『続資治通鑑長編』中華書局標点本／『文苑英華』中華書局影印本／『唐会要』上海古籍出版社標点本／『樊川文集』何錫光（校注）『樊川文集校注』（上下）巴蜀書社、二〇〇七年／『岱史』『泰山文献集成』第二卷、泰山出版社、二〇〇五年に収録（点校：封建華）／『岱覽』『泰山文献集成』第三卷／第四卷、泰山出版社、二〇〇五年に収録（点校：劉慧、他）／『泰山志』『泰山文献集成』第六卷／第七卷、泰山出版社、二〇〇五年に収録（点校：劉興順）。

参考文献（著者名五十音順）

石田幹之助 一九六七『長安の春』（東洋文庫九二）平凡社。
苑 汝杰 二〇一二『唐代藩鎮与唐五代小説』天津教育出版社。
大澤正昭 一九七三『唐末の藩鎮と中央権力』『東洋史研究』三三―二、一

— 二二頁。

—— 二〇〇五『唐宋時代の家族・婚姻・女性』明石書店。

笠松 哲 二〇〇九「天下会同の儀礼」『古代文化』六一—一、一一—二二頁。

—— 二〇一二「金輪王、封禅す」『洛北史学』一四、九九—一一九頁。

菊地章太 二〇一二『道教の世界』講談社。

桐本東太 一九九七「始皇帝の第一回巡狩と封禅」『日中文化研究』別冊三（再録）：『中国古代の民俗と文化』二〇〇四、一三六—一四六頁。

金 澄坤 二〇〇六「論中晚唐河朔藩鎮割拠与聯姻的關係」『学術月刊』三八—二二、一三六—一三五頁。

金 文経 一九八四「唐代高句麗遺民の(の) 藩鎮」『唐代の(の) 社会斗(と) 宗教』崇実大学校出版部、三五—六一頁。

窪 徳忠 一九七七『道教史』山川出版社。

巖 耕望 一九六九「唐代方鎮使府僚佐考」『唐史研究叢稿』新亜研究所、一七七—一三六頁。

小南一郎 二〇〇四「霍小玉伝に見る唐代伝奇小説の挫折」『桃の会論集』二（再録・改題）：『唐代伝奇小説論』岩波書店、二〇一四、二〇九—二五一頁。

沢田瑞穂・窪徳忠 一九八二『中国の泰山』講談社。

Chavaanes, E., 1910, *Le T'ai chan : essai de monographie d'un culte chinois : appendice 'Le dieu du sol dans la Chine antique'*, Paris : Imprimerie Nationale (邦訳：菊地章太『泰山—中国人の信仰』勉誠出版、二〇〇一年)。

宋 卿 二〇一〇「唐代平盧節度使略論」『中国辺疆史研究』七六一—二四五—二五二頁。

孫 慧慶 一九九二「唐代平盧節度使南遷之後瑣議」『北方文物』三二—四、七三—七九頁。

谷川道雄 一九七八「河朔三鎮における節度使権力の性格」『名古屋大学文学部研究論集』七四、五一—四頁。

—— 一九八八「河朔三鎮における藩帥の承継について」栗原益男先

生古稀記念論集編集委員会（編）『栗原益男先生古稀記念論集 中国の

法と社会』汲古書院、三八五—三九八頁。

陳金鳳・汪超 二〇一四「唐玄宗泰山封禅与道教之關係」『北京聯合大学学报』(人文社会科学版) 四三—二二、三九—四四頁。

鄭 炳俊 二〇〇四「李正己一家の(の) 交易活動斗(と) 張保臯」『東国史学』四〇、五三—五六〇頁。

礪波 護 一九七五「唐の官制と官職」小川環樹編『唐代の詩人』大修館書店(再録)：『唐の行政機構と官僚』一九九八、中公文庫、二〇三—二二二頁。

中田美絵 二〇一四「沙陀の唐中興と五臺山」原田正俊(編)『日本古代中世の仏教と東アジア』関西大学出版部、三—二二頁。

新見まどか 二〇一二「唐代後半期における「華北東部藩鎮連合体」『東方学』一二三、二〇—三五頁。

—— 二〇一三「唐後半期における平盧節度使と海商・山地狩猟民の活動」『東洋学報』九五—一、五九—八八頁。

二階堂義弘 二〇〇七「海神・伽藍神としての招宝七郎大権修利」『白山中国学』一三、四二—五四頁。

二ノ宮聡 二〇〇九「炳靈公信仰と『封神演義』」『関西大学中国文学会紀要』三〇、一三—一五一頁。

朴 永哲 一九九七「中世中国における地獄と獄訴」『史林』八〇—四、九四—一一頁。

樊 文礼 一九九三「唐代平盧淄青節度使略論」『煙台師範学院学报』(哲社版) 一九九三—二、二七—三三頁。

馮 金忠 二〇一〇「唐代河北藩鎮節度使略論」『唐代河北藩鎮研究』社会科学出版社、二〇—二八頁。

—— 二〇一二B「唐代河北藩鎮統治下的仏教」『唐代河北藩鎮研究』科学出版社、一二—一四一頁。

堀 敏一 一九六〇「藩鎮親衛軍の権力構造」『東洋文化研究所紀要』二〇(再録)：堀二〇〇二、三四—九八頁。

—— 二〇〇二「唐末五代変革期の政治と経済」汲古書院。

柳田聖山 一九六〇「唐末五代の華北地方に於ける禪宗興起の歴史的社会的事情について」『日本仏教学会年報』二五、一七一—一八六頁。

山内晋次 一九九四「延暦の遣唐使がもたらした唐・吐蕃情報」『史学雑誌』一〇三—一九（再録・改題）『奈良平安期の日本とアジア』吉川弘文館、二〇〇三、三六一—六六頁。

雷 聞 二〇〇一「唐代道教与国家礼儀」『中華文史論叢』六八、六二—七九頁。

劉 慧 一九九四『泰山宗教研究』文物出版社。

渡邊 孝 一九九一「唐・五代の藩鎮における押衛について（上）」『社会文化史学』二八、三三—五五頁。

一九九五「魏博と成徳」『東洋史研究』五四—二、九六一—三九頁。

二〇〇一「唐代藩鎮における下級幕職官について」『中国史学』一一、八三一—一〇七頁。

注

(1) 小説を活用した代表的な著作として、唐代の文化については石田一九六七が、家族構成については大澤二〇〇五がある。

(2) 総合的な研究には、堀一九六〇／谷川一九七八／谷川一九八八／渡邊一九九五などがある。

(3) 貞元初、平盧帥李納病篤、遣押衛王祐、禱於岱嶽、齋戒而往。及嶽之西南、遙見山上、有四五人。衣碧汗衫半臂、其餘三四人、雜色服飾、乃從者也。碧衣持彈弓、彈古樹上山鳥、一發而中、鳥墮樹、從者爭掩捉。王祐見前到山下人、盡下車卻蓋、向山齊拜。比祐欲到、路人皆止祐下車。此三郎子七郎子也。遂拜碧衣人。從者揮路人、令上車。路人躊躇、碧衣人自揮手、又令人上、持彈弓、於殿西南、以彈弓斲地。俯視、如有所伺。見王祐、乃召之前曰、何爲來。祐具以對、碧衣曰、君本使已來矣。何必更爲此行。要見使者乎。遂命一人曰、引王祐見本使。遂開西院門引入、見李納荷校滅耳、踞席坐於庭。王祐驚泣前伏、抱納左脚、噬其膚。引者曰、王祐可退。却引出、碧

衣^尤在殿^階、謂祐曰、要見新使邪。又命一人、從東來。形狀短闊、神彩可愛。碧衣曰、此君新使也。祐拜訖、無言。祐似欠嗟而遲者久之、忽無所見、惟蒼苔松栢、悄然嚴靜。乃薦奠而迴、見納、納呼入卧内、問王祐。祐但以薦奠畢、擲糲蒲投、具得吉兆、告納。納曰、祐何不實言、何故噬吾足。於是舉足、乃祐所噬足跡也。祐頓首、具以實告。納曰、適見新使爲誰。祐曰、見則識。不知其名也。納乃召三人出。至師古、曰、此是也。納遂授以後事、言畢而卒。王祐初見納荷校、問曰、僕射何故如此。納曰、平生爲臣之辜也。蓋不得已如何、今日復奚言也。〔出集異記〕

(4) 平盧軍の概要は、金文経一九八四／孫慧慶一九九二／樊文礼一九九三／鄭炳俊二〇〇四／宋卿二〇一〇／新見二〇一三など参照。

(5) 泰山関連の研究は枚挙にいとまがないが、代表的な著書には Chan *et al.* 1910／沢田・窪一九八二／劉慧一九九四がある。

(6) ただし封禪の場所は必ずしも泰山ではなく、例えば唐代には則天武后が嵩山で封禪した（『旧唐書』卷六、則天皇后本紀、一二四—一二五頁）。彼女の封禪については、仏教との関連に注目した笠松二〇一〇二がある。

(7) 字中勝、長慶光州刺史。

(8) 『資治通鑑』卷二四二、元和十四年（八一九）二月条、七七六八頁。

(9) 蒿里祠、距岳廟西南三里許、社首壇之左。自唐至宋、香火不絶。

(10) 五行と五方・五色・五岳の関連は、窪一九七七、六七—六九頁／菊地二〇一二、七六頁参照。

(11) なお「碧」字を冠した泰山神には、宋代に登場した女神、碧霞元君がおり、この場合の「碧」も東方、すなわち泰山を象徴する色と解されている（『劉慧一九九四、一四二頁』）。

(12) 己卯、東岳三郎神贈威雄大將軍。初、帝不豫、前淄州刺史劉遂清、薦泰山僧一人、云善醫、及召見、乃庸僧耳。問方藥、僧曰、不工醫。嘗於泰山中親觀獄神、謂僧曰、吾第三子威靈可愛、而未有爵秩。師爲我請之。宮中神其事、故有是命。

(13) 『宋史』卷一〇二、礼志五五、嶽瀆条、二四八六頁。なお炳靈公につ

いては、二ノ宮二〇〇九が詳しい。

- (14) ただし東岳大帝の息子は、『統資治通鑑長編』(巻五一四、元符二年(二〇九九)八月条、一二二五頁)など宋代以降の史料では五人とされる。

- (15) 高宗・玄宗の封禪については、雷聞二〇〇一／笠松二〇〇九／陳金鳳・汪超二〇一四などの専論がある。

- (16) 『旧唐書』卷二三、礼儀志三、九〇一頁。

- (17) 至貞元二年八月、詔太常卿裴郁等十人、各就方鎮祭岳瀆等(『唐会要』卷二二、嶽瀆、四九八頁)。

- (18) 唐代の泰山における祭祀、とくに封禪の意義については、劉慧一九九四、一〇〇頁／笠松二〇〇九、一七頁参照。

- (19) 齊人、經地數千里、倚渤海、墻泰山、連大河、精甲數億鈐劍、其阨可爲安矣。然兵折於潭趙、首竿於都市。

- (20) 文曰、平盧淄青度支判官・中大夫・檢校尚書工部郎中・兼侍御史敬審、節度押衙・中大夫・試殿中監馮珣、文林郎・守兗府兵曹參軍田浩、朝散大夫・行任城県令・權知乾封県令楊序、節度驅使官・朝散郎・試光祿寺主簿明干、文林郎・任城県尉高鏗、山人呂滔。唐建中元年二月廿九日、登岱岳因訪瑤池、故志之。

右記在東碑側第七層。

- (21) 使職の下に置かれた判官には広義・狭義二通りの用法があるが、この場合は狭義で、使・副使に次ぐ檢勾官相当の地位を意味する「嚴耕望一九六九、一九一頁／礪波一九七五、二二八―三三〇頁」。度支使は財政担当の使職である。

- (22) 押衙とは、藩鎮下で軍務の他、諸々の事務も司った人物が冠した肩書である。「渡邊一九九一、四一―四四頁」。

- (23) 驅使官については、渡邊二〇〇一、八八―八九頁参照。

- (24) 『資治通鑑』卷二三三、代宗永泰元年(七六五)条(七一七五頁)。

- (25) 乱の詳細な経緯は、大澤一九七三など参照。

- (26) 『旧唐書』卷一四二、李惟岳伝、三八六―三九六頁。

- (27) 『新唐書』卷二三三、李納伝、五九九一頁。なお、李納及び彼の縁者

の墓誌は、管見の限り現時点では発見されていない。

- (28) 『旧唐書』卷二二四、李師古伝、三三三七頁。

- (29) 河朔三鎮や平盧軍、藩師交替については、堀一九六〇／谷川一九七八／谷川一九八八などが総合的に検討している。

- (30) 吾年十五擁節旄、自恨不知稼穡之艱難。況師道復減吾數歲。吾欲使之知衣食之所自來、且以州縣之務付之、計諸公必不察也。

- (31) 『旧唐書』卷二二四、薛平伝、三五二六頁。

- (32) 『旧唐書』卷一四一、田季安伝、三八四七頁。

- (33) 『旧唐書』卷二二四、李師道伝、三三三八頁。

- (34) 節度使の正妻は、①部下の武將の娘、②他の節度使の娘、③朝廷の公主、が多い(『金盞坤二〇〇六』)。李納と李宝臣の娘李氏との婚姻は

- ②にあたるが、李宝臣はこうした婚姻を通して華北東部の安史軍系藩鎮を束ねた人物である(『新見二〇二二』)。ゆえに、李氏は李納の正妻として平盧軍に迎えられたと考えて大過ない。そうだとすれば、

- 李師道の異母兄李師古の生母は、李納の妾と考えるのが妥当である。例えば成徳節度使では、父から世襲を望まれた兄が、自分が庶子であることを理由に嫡子の弟に藩帥位を譲った例が(『旧唐書』卷一四

- 二、李惟誠伝、三八七〇頁)、魏博節度使では実子の無い嫡妻が庶子の一人を敢えて養子とし後継者に育てた例がある(『旧唐書』卷一四

- 一、田季安伝、三八四六頁)。また、河朔三鎮は嫡長子を節度副大使に任命することで、藩帥の継承を円滑に行おうとした(『馮金忠二〇

- 一一A、二四―二五頁)。

- (36) 成徳軍節度王武俊、率師次于德・棣二州、將取蛤蜊及三漢城。……及納卒、師古繼之。武俊以其年弱初立、舊將多死、心頗易之、乃率

- 衆兵、以取蛤蜊・三漢爲名、其實欲窺納之境。

- (37) 『旧唐書』卷一四二、王武俊伝、三八七二頁。

- (38) 『太平広記』卷一三六、潞王、九七九頁。

- (39) 李正己期については、『資治通鑑』卷二二五、大曆十二年(七七七)条(七二五〇頁)を、李師古・李師道期については山内一九九四、四二―四三頁を参照。

- (40) 師古雖外奉朝命、而嘗畜侵軼之謀、招集亡命、必厚養之、其得罪於朝而逃詣師古者、因即用之(『旧唐書』卷一二四、李師古伝、三五三七頁)。
- (41) 高沐については『新唐書』卷一九三、高沐伝、五五五七頁を、劉悟については『旧唐書』卷一六一、劉悟伝、四二三〇頁を参照。
- (42) 悟獨表師古子明安爲朗州司戸參軍(『新唐書』卷二二三、李師道伝、五九九五頁)。
- (43) 注(40)参照。

(関西大学東西学術研究所非常勤研究員)